

# 海 (かいし) 市

No. 36

## ● 詩

02 横山 仁 生活の柄 (29)

04 前田 勉 残夜

## ● エッセイ

06 細部俊作 本をひらく (1)

09 佐藤ただし 水田とツバメ (34)

14 横山 仁 雑記 (36)

生活の柄 (29)

横山 仁

おいかけてくる し を

こううんにも かわしきったのか

それとも

よみのくに からだったか

ふみがとどく

「12月に7回目のコロナワクチン接種しました」

ばらまかれた

むせきにんな し は

かねのなるきをそだてただろう

たましいは きえ

やがて

だれもいなくなつた ほしに  
ひょうき\*がやつてくる

\*現在は間氷期。

## 残夜

前田 勉

色変えてゆく移ろいの中

鬱々と眠れないまま過ぎた時間が

遮光カーテンの

閉じきれなかった隙間に取り残されている

寺の石畳の湿った<sup>あしおと</sup>梵

おもいのほか軽かったカサカサと鳴る箱

手向けた香の匂<sup>こう</sup>いが残る袖口

簡条書きの失意

行き場をさがす言葉

語ることから遠退いた日々の重さ

伝えることを失した悔い

そして

軋み続ける不整脈

ピリピリと過敏になる耳孔じこう

数えあげられていく今に

またひとつ刻まれて

部分欠落していた記憶が

カーテンの裾から

漏れ出してくる

## 本をひらく(一)

細部 俊作

### 1 「ウクライナ・ダイアリー」(古川英治)

著者は日本経済新聞社に二八年勤め、モスクワ特派員、国際部編集委員などを経て、二〇二一年同社を退社。同年一二月からキーウに在住。ロシアによる軍事侵攻が始まった頃はすでにフリーで活動していた。夫人がウクライナ人で、この本は生活の基盤であるウクライナ側の視点に立っており、侵攻が始まった翌年二月のところまで書かれている。

二〇二二年二月二十四日、ロシアが攻めてくるという憶測が開始したキーウ市民の不安な様子が描かれている。それはいつ、どっちの方から来るのかといった情報が飛び交うなかで、彼らは、武器をもって戦う、戦

火の及ばないところへ退避する、自宅にとどまる、などの判断を迫られていた。

この本に出てくるウクライナの人たちは、明るく、一本気な人たちだと感じた。彼らの脳裏には、一九三〇年代始め、旧ソ連時代にスターリン政権が計画したホロドモール(集団農場政策に従わないウクライナを大規模な飢餓に陥れて、三三〇万人以上の餓死者を出した)や、一九九一年の独立後にもロシアによる幾度かの弾圧を受けてきた歴史の記憶があるようだった。彼らの明るさの背景には自分たちの歴史への自負心があるように感じた。

著者がインタビュした兵士、現職閣僚、鉄道員、老若男女の市民、その彼や彼女たちと著者が、どこか非常時における高揚感を抱きながら受け答えをしているように感じた。市民の中にはひと昔前の激動のなかでの体験など困難の仔細も語られ、戦争が人の人生を狂わせてきたことをおしえている。

市民の口から何度も自由という言葉が出てくる。「私はただ自由で民主的な国に住みたい」、「自由こそウクライナの信仰なのだ」、「我々は自由のためには自己

犠牲はいとわれない」。そして、今回の侵攻によって住居を破壊された人はこんなふうにいる。「真つ暗で暖房もなく水も出ない。でも自由の見返りだと思えば、こんな安いもんよ」。ウクライナの人たちにとつて、自由が、空気や水のように人の生存に欠かせない大切なものであることが伝わってくる。その自由を奪おうとする敵に対しては断固戦うという気構えを、歴史のなかで培ってきたように思える。

ロシアが侵攻を始めて間もなく、日本では東京などでウクライナ国旗を掲げたデモがあったり、政府は欧米とともにロシア制裁を始め、ウクライナからの避難民受け入れなどがあつた。日本でのこうした動きについて、イギリスのある歴史家は著者にこういったという。「ウクライナの戦争を日本人がどう自分と関連づけるのかがよく分からない」、「第二次世界大戦後の短期間を除いて、日本は外国に占領されたことではなく、侵略者に抑圧された歴史はない。日本人は血を流して自由や民主主義を勝ち取ったわけでもない」。これは、日本人は自由や民主主義を自分の生存に欠かせないものとして本気で認識しているのか、と問うているのだ

と思つた。これにはいろいろと思ひ浮かぶことがあつた。第二次世界大戦後、アメリカによつてもたらされた自由とか民主主義ではあつたが、戦後間もなく七九年、たとえば人権意識や報道の自由の度合いは他の国に比べて低いとか、男女間格差についても世界からかなり遅れているという調査結果があること、国政選挙も地方選挙も投票率が低迷していること、特に若い世代においてそれが目立つことなどなど。

侵攻三年目に入つて、いま、ウクライナの劣勢が伝えられている。多くの人の命が奪われ、住まいも国土も破壊されている。ウクライナだけではなく、パレスチナでも悲惨な状況が終わらない。武器の力にものを言わせて、人の命を何とも思わない世界の再来などみたくはない。

KADOKAWA 二〇二三年八月刊

## 2 「畑が教えてくれたこと」(小宮山洋夫)

著者は、埼玉県史部の丘陵地で畑を借りて野菜を

作っている。借りた畑で野菜作りというのは自分と同じで、近さを感じる。その肥料として私は長いこと化学肥料を使ってきたが、著者は油粕を買い求めるくらいで、ほかは落ち葉、草、野菜くずだという。いわゆる自然栽培かと興味をわいた。昨秋、私は自宅近くでケヤキの落ち葉を拾い集め、四五リットルの袋六つに詰め、それを畑に漉き込んだ。といっても、この春、化学肥料を使わなかったかというのと、やはり前年同様のやり方を繰り返した。野菜の出来が心配だからで、相応の時間と手間をかけて野菜を作る以上、相応の結果を得たいという誘惑は強かった。

ちよつと当たってみると、自然栽培とは農薬と肥料を使わないで栽培するものだそうで、植物と土が本来もっている力を引き出す農業で、自然に負荷をかけない永続的な農業方式だという。となると著者の栽培法とも違う、何か原理的で深い感じ。もう少し知りたいと思った。

本書には畑に生える雑草についても多くふれている。この「雑草」を新明解国語辞典（二〇年ほど前）に探してみると、利用価値がないとして注目されること

がない草、などとあった。ネットには、望まれていないところに生えている全ての草だとも記されていた。この本では、「雑草」という呼称の起源について、経済発展の途上で企業が平均的な人間像を求め、そこから外れた者に対する差別の誕生と時を共にしているに違いない、として、偏った有用性といった基準で植物をみるのは人間のおごりだとも書いていて、なるほどオ、と思ったものだった。あらためて自分の畑の地面を探して調べてみると、カタバミ、ツメクサ、ウスベニツメクサ、ナズナ、ハコベなどというのだった。こうして目の前の草花の名前を知ると、急に親しくなつたような気がする。季節が進んでゆくと畑で生きる草の顔ぶれも変わっていく。変わればまた名前を覚えればいいから、愉しみが増えたというもの。畑、野菜づくり、雑草……それらに寄せる愛着が感じられる一冊だった。

創森社 二〇一六年四月刊



## 水田とツバメ (三四)

佐藤ただし

・ 永続

今年初めてツバメを見かけたのは、四月の初めだった。雄物川の橋を越えたところにあるスーパーで、窓の外に目を向けると駐車場の上をツバメが飛んでいった。ここへやって来て間もないのか、慣れない場所にとまどっているような飛び方だった。ようやく寒さが和らいできたところに、ツバメは風に乗って数千キロを飛行し、日本にやって来る。

ところで、ツバメは何故日本に渡って来るのか。タイやカンボジアなど、日本より暖かいところで、ずっと暮らしていればよいのにと思うのだが、日本まで来るのにはそれなりの理由があるようだ。ネットによると東南アジアでは、ツバメのように昆虫をエサとする

鳥が多く、ヒナを育てるにはエサが足りないのだという。そこで、競争相手の少ない日本にまでやって来てヒナを育てているそうだ。

以前、ツバメが隣家の軒先に巣を作ろうとして、その場所をスズメに追われていたのを見たことがあった。その時、ツバメは他の鳥と戦う武器を持たない鳥なのだと思った。相手を威嚇する強い嘴をしているわけでもないし、脚が弱く鋭い爪も持っていない。スズメのように縄張りを主張する鳥にも追い払われる。そのかわり、その弱さを補う飛翔能力で、飛びながら虫を捕まえる技を身に付け、しなやかな身体で数千キロの距離を飛ぶ事もできる。

トラクターで田んぼを起こしているとツバメが何羽も飛んできて、トラクターすれすれの所で身をひるがえし、またやって来ては飛んで行くという行動を繰り返したりするが、柔らかな身のこなしでこのように飛べるのはツバメだけかもしれない。人の近くまで来て、遊んでいるようにしているのは、イルカに似ていると思う。鳥の世界ではけっして強くないツバメだがそんなツバメを守ってくれる人に好意を持っている

鳥のようにも見える。

鳥の世界も力のあるものが生き延びてゆく世界だと思いが、他の鳥と戦わずに日本までやって来るツバメの行動も一つの生き方かもしれない。ツバメを見ていると老子を思い出すことがあるが、老子もツバメを見て暮らしていたことだろう。

ツバメが日本に渡って来るのは、子育てするためのエサの確保が一つの理由だが、人も何万年かの時間をかけてこの日本列島にやって来たのだろう。小泉保の【縄文語の発見】を読むと、今から二万年前は、地球は氷河期の真つ盛りで、当時は陸地に積もった雪や雨が凍り付いて海に戻らなかつたため、海面は今よりも一〇〇メートル〜一四〇メートルほど下がっていたらしい。その結果、東アジアや東南アジアの大陸棚が干上がり、大きな陸塊をなしていたという。そのため、黄海や東シナ海、南シナ海などの大部分に水がなくて、日本列島は大陸と陸続きだったという。

また、【日本人はるかの旅④イネ、知られざる一万年の旅】NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編

によると、今から三万年前から二千年前までに幾重にもわたって日本列島に人々が渡来し、多彩な「原日本人」たちがそれぞれ持ち寄った文化を築いていったという。

その一つが水田稲作だ。イネを作る技術と種子を持った人々が日本にやって来たのは、遺跡から出土する木炭や、炭化したコメの測定方法の進展から、これまでより五百年早い、三千年前（紀元前一〇世紀）といわれる。朝鮮半島南部から船に乗った人々は九州や西日本に上陸し、イネ作りを始めた。その後、イネ作りは北上し、この秋田でもイネが作られるようになった。沢の奥にある溜め池も朝鮮半島でよく見られるものだという。

地表の岩石が土になるには三億年から数百万年もかかるというが、そうしたとてつもなく長い時間をかけて出来た土を、先人は農業に適した土壌に変え、区画された田んぼにして現在がある。

しかし、その田んぼも今は作り手が減り、耕作されずに葎や萱が繁り、かつてはそこでイネが作られていたことが分からないようになってきている場所もある。私

が住むところの近くの沢のひとつもすべて原野になった。その沢のさらに奥にある別の沢では、八〇代の夫婦が二人で田んぼを作っている。この夫婦はあちこちに点在していた自分の田んぼを交換し、作りやすいようにその沢に集め、二人だけで十枚ほどの田んぼすべてを作っている。イネを作るのが好きなだけと言っていた親父さんだが、この人がイネづくりを止めると、この沢も原野に戻るかも知れない。

佐藤洋一郎によると、人が山野を切り開き、田畑にして耕作することを攪乱と呼び、耕作されていた田畑がもとの自然の姿に戻ることを遷移と言うらしい。こうした大局的な捉え方は、田畑を作ることが出来ずに荒れたままにしていることを、作っている自分の責任と考える農家に、別の視点を与えてくれる。

人類が食糧を得るために農耕を始めて、一万年以上経過したと言われている。食糧を作る技術やその食糧を運ぶ手段が発展し、ひとりの人間が生産することが可能な食糧が増えて、しかも遠くまで運ばれるようになる、農業以外の職業に就く人が増えてゆくことになる。

日本は気温が高い時期に雨量が多く、植物の成長には適しているところだ。多量の雨を運ぶ河川が土砂を運び、堆積した場所の土を肥沃にし、そこが農地になる。また、日本は火山地帯のため、太古から噴火した火山灰が土地に堆積している。この火山灰は養分を多く含んでいるが、作物が良く育たず、農業には適さないとされてきた。しかし、土の研究により、この火山灰の構造が分かり、リン酸分を多く含む肥料を入れることで、作物が多く穫れるようになったという。

土地が肥沃で雨量も多い日本で、食糧を輸入に頼り、耕作放棄地が増えている現状は、現代人が恵まれた日本の風土に甘えているようにも思える。

四月に入り、春の農作業が始まった。今年は四月の二〇日頃から二週間ほど田起こしをした。面積にするのと三〇ヘクタールくらいだろうか。殆どが四角に区画された大小様々な田んぼだ。今年になって生え始めた雑草や枯れた稲株をトラクターで耕起し、土の表面に現れないようにしてゆく。

五月に入り、田起こしをした田んぼに水をいれる。

沢の奥にある溜め池の水を放流し、また、雄物川からもポンプを稼働させて水を上げる。田んぼ全体に水が行き渡るには四、五日かかる。

水上げから三日もすると、この時期を待っていたかのように、カエルの鳴き声が夜に聞こえてくる。水の状態を見に田んぼへ行くと、懐中電灯に照らされた水面にアオガエルが丸い目玉を上に向けていた。

田んぼに水を入れて土に充分水を含ませ、代掻きをする。田植え後の田んぼの管理に大きく影響が出るため、代掻きは非常に大事な作業になる。

雄物川のそばに開けた田んぼの代掻きを終わると、今度は沢の中に入り、代掻きをする。近くの沢で、あの老夫婦が二人で田植えをしていた。

この季節は樹々の青葉が繁り、風が葉を揺らしている。作業の合間にエンジン止め、深呼吸すると良質の空気を吸っているようで気持ちが良い。天気の良い日に代掻きをした後を見ると、表面をうっすらと水が覆い、陽の光を受けて一面に輝いている。田んぼが水田に生まれ変わったように見える。

農地を畦で囲う田んぼは、雨が降っても土が流出せず、水を入れてイネを育てるため、塩類が堆積せず、畑作で問題となる塩害も発生しない。そして水を入れることで、ラン藻という藻が生まれ肥料が作られるので、連作障害が発生せず、無肥料でも七割位の収量が穫れるという。人類の農耕の歴史を調べ、世界のあちこちの田んぼを見てきた池橋宏が、水田は奇跡の発明と言った言葉に頷ける。

川が運んだ土や、山の土で作った田んぼにイネが育ち、鳥が飛び、人々が暮らす。地上の生き物は変化し、土は永続してゆく。

#### 参考図書

稲作の起源 池橋宏

稲作渡来民 池橋宏

土と人のさずな 小野信一

イネの歴史 佐藤洋一郎

縄文語の発見 小泉保

日本人はるかな旅④イネ、知られざる一万年の旅

NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編

《新》弥生時代 五〇〇年早かった水田稲作 藤尾

慎一郎

超越者と風土 鈴木秀夫

森林の思考・砂漠の思考 鈴木秀夫

## 雑記 (36)

横山 仁

前号 35号で、佐藤氏が稲は多年草であるということにふれていた。池橋宏氏の『稲作の起源』（講談社選書メチエ）の発行は、アマゾンでみたら2005年12月10日だったので、今の学説はどうなのかネットで見てもよかったですところ、「稲の多年草化栽培」という記事がヒットしてきた。

以下、MANNA@Peace Makin Laboの「私たちの新しい物語を紡ぐ〜稲の多年草化栽培＊それは野生に還る新たな旅。」から、少し紹介する。<https://agriab.kyodo.co.jp/2022/04/post-370.html>

(引用開始)

稲の多年草化とはどういうこと？

稲が多年草化していくこととはどういうことだろうか。  
それは、稲の再野生化ということ。

そもそも稲は多年草であり、それを人間が収量を上げ、効率的に生産していくために改良していき、結局、一年ごとに種子から育て刈り取る方が収量と効率性という方法が定着したのが今の一般的な稲作。

そして、そのために毎年耕され、化学的な肥料や除草剤などの突入により、生き物の多様性が崩れて、稲が野生化できる環境じゃなくなりました。

大量生産が求められる中、農家さんたちの重労働を考えればそれも仕方ないことと思う。なのでそれを否定するわけではない。ただ、小規模で自給の範囲での稲作ならば、そこを求める必要はない。

小川さん [引用者注、小川誠氏で、『稲の多年草化栽培』を2022年4月1日、地湧の杜から出版。「稲の多年草化栽培」は、3月18日に商標登録が認められたという] はじめ、これまでの自然農の試みは効率性と生産性を

第一優先にする流れを廻り、耕さず、化学肥料や農薬を使わず、人間は感性と知恵を働かせ、手を使いながら作物が成長しやすいように協力するところを歩んでいる。

それは、生き物たちにとってのパラダイスを生み出して、そんなご機嫌な圃場の中で稲もまた本来の自分を思い出していったのかもしれない。

いの中のDNAは人間の計算や計画よりも強固なものなのだと思う。

(引用終わり)

この池橋宏氏『稲作の起源』の帯に「縄文稲作はなかった」とあったが、弥生時代のような規模の稲作はなかったとしても、「古代ずんだミステリ」さんの「渡来人が伝えたものではなかった！常識を覆す新説「稲作起源＝日本」最新研究で判明」(2ヶ月前) (<https://www.youtube.com/watch?v=Aa9OekERnWI&t=1058s>) によれば、「12,000年前の鹿児島県の薩摩火山灰の下層から」プラントオ

パール(植物の細胞の化石)が発見されているし、「稲作が確認できる最も古い遺跡は6,000年前のもの」という。そして、縄文時代に「今より平均気温が10度近く高い亜熱帯のような気候になっていた地域があったと推測される」。つまり、「日本に稲が自生していた可能性がある」ということだ。

そして、稲作は中国・長江文明からはじまったとされるが、「アカホヤの大噴火で縄文人が大移動したタイミンズと、朝鮮南部で稲作は始まったタイミンズと、長江文明の『河姆渡文化』が栄えたタイミンズと、全てが一致する」。このことから、「コレは縄文人が稲作を世界に広めた説の根拠になるのでは？」と述べている。

このほか、縄文時代の稲作については、YouTubeでいろいろみることができる。

また、「人類アフリカ起源説」も、揺らいでいるようだ。

\*

日本の明治乳業(明治製菓フエルコン)が殺人ワケ

チンの製造をはじめるといふニュースを聞いて、明治の宅配を中止した。

その後「移ろうままに 2」のめいさんが、《井上正康先生「世界への警告」【コロナ危機1】》を紹介している。2024-04-13

(引用開始)

井上正康先生が「日本製ワクチンを決して信用してはいけない」という英語のメッセージを世界に向けて発信されています。



\* \* \* \*

mRNA ワクチンの開発と生産が日本で進みつつある。そして今年の秋から、新しいタイゾルの mRNA ワクチンである「レプリコンワクチン」の接種が始まるようにしている。

コロナパンデミックにおいて始めて使用された mRNA ワクチンによって多くの被害が起きたにも関わらず、日本政府は反省もなく、新たな被害を起こそうとしている。レプリコンワクチンはスパイクタンパクの産生を止める機能を持たず、接種者からエクソソームを経由して他者に有害成分が伝播することも懸念されている。よって、「私はワクチンを接種しないから大丈夫」というのは間違っている。日本全国、世界全体で阻止しなければ、取り返しのつかないことになる可能性がある。

そこで発せられたのが、井上教授による世界に向けたメッセージである。多くの人にその危険性を知ってほ



しい。協力してほしい。その願いを込めて、ここに文字で記録する。

[https://note.com/yukiharuru2020/n/n7c6d9e0f00ec?sub\\_rt=share\\_b](https://note.com/yukiharuru2020/n/n7c6d9e0f00ec?sub_rt=share_b)

Full text in Japanese (日本語全文)

新型コロナウイルス感染症における人権侵害についてメッセージを送るという貴重な機会を与えていただき感謝申し上げます。大阪市立大学医学部名誉教授の井上正康と申します。私の専門は分子病理学と医学です。

パンデミックは、WHOによって世界中のすべての人々へのワクチン接種を推進するための誤った口実として利用されました。通常10年以上かかるワクチン開発期間をワープ・スピード作戦と称して1年未満に短縮する計画が立てられ、遺伝子ワクチンの誤った概念を隠蔽するために使用されました。開発期間を短縮するという名目で、極めて危険な方法が選択されまし

た。

ウイルス遺伝子を筋肉に直接注射し、ヒトの体内で有毒なスパイクタンパク質を生成させ、免疫系を刺激するというものです。全く新しい手法であるため、人類の歴史の中で一度も適用されたことがなく、ほとんどの医師は適切なインフォームド・コンセントを与えることは不可能です。

しかし、ワクチン接種を促進する無責任な政府とメディアのキャンペーンにより、残念ながら日本人の8割はワクチン接種済みです。これまでに7回の接種が行われました。これは世界最大にして最悪の結果であり、人類史上、例のない恐るべき被害を誘発する結果となりました。

私は、健康な人々、特に健康な子供に対する実験的遺伝子治療の不正使用は、極度の人権侵害であると考えています。しかし、日本の武見敬三厚生労働大臣は、「遺伝子ワクチンによって引き起こされる深刻な懸念はあ

りません」と主張している。被害者の現状に懲りず、次の「パンデミック」に備えて新たなワクチン生産体制の構築を目論んでいます。これは信じられないほど狂った状況であります。

日本政府は、自己増殖型「レプリコン」ワクチンと呼ばれる新しいタイプのワクチンを世界で初めて承認し、今秋から冬にかけて接種を開始する予定です。このプロジェクトには経済産業省が巨額の補助金を拠出し、日本ではこの「新型ワクチン」を生産する工場が次々と建設されている。私はこれらの工場のいくつかを直接訪問しました。

さらに日本政府は現在、ワクチン開発ができる製薬会社に対し、9億ドル相当の大規模臨床試験を公募している。疾病 X による「次のパンデミック」に備えるという名目で、ウーヅ・スビード作戦時のさらに3分の1の期間に短縮することを目的として、つまりこれはダボス会議で発足したCEPI（感染症流行対策イノベーション連合）の「100日ミッション」の一環であ

ると推測します。すなわち、ワクチンを100日で開発・供給することで「ワクチンのビジネスサイクル」を短縮しようとしている。これは、人権の観点を無視することによってのみ可能となります。

第77回世界保健総会で採択されようとしているWHOの国際保健規則 IHR 改正といわゆるパンデミック条約は、そのような非科学的な狂気の計画に合理性と法的拘束力を与えようとしている。このまあいけば、日本製ワクチンが誤った信頼を装って輸出される危険性が高い。もし日本がワクチン加害者になれば、取り返しのつかない被害を後世に残すことになる。したがって、日本政府の行動は国際的な協力によって阻止されなければなりません。

日本人にワクチンの危険性を啓蒙する講演を始めてもう3年も経ちますが、主流メディアの壁を突破することは依然として困難です。YouTube でワクチンについての真実を語れば、1日以内に削除されます。現実には私たちは、ほぼ毎日、検閲と言論弾圧に直面してい

ます。そこで私は最後の言論の砦である本の出版に希望を託し、「WHO 脱退」というタイトルルの本を出版しました。日本政府の状況を変えることは政治的に絶望的であるため、今の動きを止めることは困難です。

私が世界に伝えたいメッセージは、将来、疾病 X が発生した時、短期間で開発された日本製のワクチンを決して信用してはいけないということです。国境を越えたコントロールが行われた場合、人権を守るため、各国間で真実を共有することは非常に重要であり、これが団結と連帯への第一歩であると信じています。世界各国間の情報交換のプロセスを通じてのみ、私たちは絶望の中に希望を見つけることができます。

私のメッセージが皆さんやご家族の健康的な生活を守るために役立つことを願っています。ご清聴ありがとうございました。

(引用終わり)

日本でパンデミック条約反対のデモがあり、数万人が参加しているが、ワズゴミは報道すらしないという。[5/31の日比谷野音での「WHOから命をまもる国民運動 大決起集会」は5万人ほどが参加したという。そして、集会の映像は40万人が視聴した。]

日本はアメリカの植民地だから、いいなりでパンデミック条約を通すのだろう。follow the money.

ところが、アメリカじたいはちがうようだ。

以下、「へっぴりごし」さん2024年5月10日から【BrainDead World】記事より)。

(引用開始)

22の州司法長官が、主権と市民的自由への脅威を理由にWHOパンデミック条約に反対

5月8日、22の州司法長官からなるグループはジョージア州バイデン大統領に対し、新型コロナウイルスのパンデミックに対応して世界保健機関(WHO)により大きな権限を与えるという連邦政府の計画に反対すると伝えた。

「私たちは、WHO が国民のために公共政策を直接的または間接的に設定できるようにしようとするいかなる試みにも抵抗します」と州司法長官たちはモンタナ州のオースティン・クマツセン司法長官がまとめた書簡の中で述べた。

WHO は、5月27日から6月1日まで開催される次の世界保健総会で、パンデミック協定案と国際保健規則 (IHR) の修正案について議論する予定だ。この提案は、WHO にパンデミックの予防、準備、対応についてより大きな権限を与えることを目的としている。

州司法長官たちは、提案されている修正案は「WHO を諮問的な慈善団体から世界の公衆衛生の総督に変えてしまうものです」と主張した。

彼らは、WHO にはその勧告を強制する権限がなく、米国憲法は公衆衛生政策の権限を連邦政府ではなく州に留保していると強調した。

また、協定に署名する加盟国に対し「国内法に従って、誤った情報や偽情報の防止に協力する」よう求めているため、この修正案は「世界的な監視インフラ」への道を開く可能性があるとも述べた。

「政府が新型コロナウイルスの流行下で言論の自由を抑圧するようソーシャルメディア企業に圧力をかけ、奨励していたことを考えると、これは特に危険なことです」と州司法長官たちは述べた。

このニュースは、先週 49 人の米国上院議員がバイデン氏に WHO の提案を拒否するよう促し、反対票を投じる意向を明らかにした後に発表された。

英国政府も 5月8日、協定が英国の国益と主権を尊重しない限り、WHO パンデミック協定には署名しないと発表している。

(引用終わり)

\*

アメリカ・アポロ 11 号の月面着陸はフェイクニュースだと前にも紹介したが、2024-05-11 の放知技「文殊菩薩」でも紹介されている。話の種に。

(引用開始)

アポロ着陸の痕跡がない

アポロ月面着陸は映画セット

中国の月探査船嫦娥 6 号の実況中継で、「アポロが着陸したという盆地が見つからない」と、月探査の責任者が口を滑らせた。

NASA は何度も中国にアポロの痕跡を探すなど申し入れていたが、やはりアポロ 11 号の月面着陸は壮大な嘘だったのだろう。

当時の技術では、月に着陸できたとしても、月から地球への帰還が難しく、ロケットなしでの月からの帰還は、机上の空論に過ぎない。

また、米国からオランダに寄贈された、月で採取された石なるものも、分析してみると樹木の化石で、月の石ではないという。

さらに、AI にアポロの写真を分析させて真贋を問うと、光源や影の角度が不自然なので、フェイク写真だと答えるそうである。

キューブリック監督がスタジオで撮影した映画に、全世界がころっと騙されて、60 年経ってもいまだに洗脳がとけない人も多い。

野崎晃市 (49)

(引用終わり)

かりにカラオケで歌うことがあったら、ないてしま

うだろうなあとと思う歌に、中島みゆきの「フライング」がある。中島みゆきが深夜放送をやっていたときにきた投書をもとにしたといわれている。「少年たちの眼が年をとる」なんて批評性のある表現は、ちつとやそつとじゃ書けない。

一番の歌詞のみ紹介する。

♪あたし中卒やからね 仕事をもらわれへんのや  
と書いた

女の子の手紙の文字は とがりながらふるえて  
いる

ガキのくせにと頬を打たれ 少年たちの眼が年  
をとる  
悔しさを握りしめた こぶしの中 ツメが突き  
刺さる

さて、最近 YouTube でみつけたのは、「誹謗中傷アンチに捧げる～匿名の檻-うび子【弾き語り Full ver.】という歌だった。うび子は「フライング」も歌っていて、中島みゆきの「フライング」の路線を

引きついでいるようにおもえる。(むかしふうにいえば、プロテストソング)

(引用始め)

《233,313 views Sep 26, 2020 # うび子 # 誹謗中傷 # 人殺し

各配信サイトで「人殺し」の配信がスタートしました！  
良いなと思ったら沢山聴いて、沢山拡散して欲しいです。

再生 & ダウンロード ▶ <https://upiko.lnk.to/hitogoroshi>

私の人生初のリリースがこの曲でも嬉しく思えます。

「人殺し」は誹謗中傷やアンチに捧げる歌です。

画面越しからの顔の見えない攻撃はとても怖くて心が痛いのです。

あなたにも大事な人がいるように、画面越しの人間にも「大事な人」がいて、

そして「誰かのかけがえのない存在」なのです。

こんな世の中ですが少しでも裁かれることのない人殺しが消えますように  
という願いを込めてこの曲を作りました。たくさんの人に届きますように。》

♪デリカシーもクソもない世の中になったよ  
指先で人が殺せる時代になったよ  
代償は必ずお前に帰ってくるから  
せいぜい楽しみに待ってるときな

「匿名」という名の柵の外から  
振りかざされた刃たちは  
容赦なく私を斬り刻んだ

\*寄せられたコメントより  
「友達が過去に誹謗中傷で死にました  
それが憎くて憎くて溜まりません。  
この歌を聴いてあの事が鮮明に思い出しました。どうか天国までこの曲が届きますように。」  
(引用終わり)

(引用開始)  
381 名前： anker-z 2024/05/08 (Wed) 18:28:11 (「放知  
技」より)

コロナワクチン 6600 億円分廃棄 厚労省「無駄じゃない」！？

[https://twitter.com/JINKOUZOUKA\\_jp/status/1787699798017204612/photo/1](https://twitter.com/JINKOUZOUKA_jp/status/1787699798017204612/photo/1)

日本だけが捨てるほど大量に mRNA ワクチンを買込んだ理由だけでも知りたいですね。知る権利は無いのですかね？

このお金で救えた企業どれだけあるんだろう。  
アジア途上国の支援で 1600 億円抛出してなのに、その4倍以上の金額破棄して無駄ではないと言う神経が草 [引用者注、「草」は「笑える」「ウケる」など面白い感情を意味するワードで、読みはそのまま「くさ」—ネットより] (引用終わり)

## あとがき

◆イギリスなど、7月に向けて戦争準備に入っているようだ。（「英国が緊急事態に準備を呼び掛けるホームページ開設」）。アメリカの肩代わりをした日本からウクライナ支援の金は9兆円（600億ドル）。敵国日本はどうなりますことやら。そのまえに増税メガネが日本をぶっこわすかな。（J）

◆郵便料金が10月から値上げとなるようだ。改訂されても黒字化は一時的との記事があった。今の土曜日非配達の不便さに加え値上げとなると、他の手段を利用する人が増えて一層苦境に陥るのではなからうか。間接的だが、手紙・葉書文化への影響もあるのでは。（B）

◆畑の名前も知らない雑草を知るため図鑑をもって行ったが、その草花が図鑑の写真や説明に一致しているか確信がもてないことがあった。となったときに、スマホの「レンズ」アプリを使ってみたところ「コレダ！」が案外楽にできた。このアプリは以前、同人Bが話していたものだった。地面にはいつくばって「コレダ！」をやっているうち、気分はマキノトミタロウになっていた。（S）

◆秋田市下浜八田で江戸時代中期から明治にかけて、肝煎をしていた鈴木家の古文書集を読む機会があった。解説された文書を読むと、当時課せられた年貢の高さや冷害によりたびたび年貢を払えず、一部免除してほしいという嘆願書が目についた。当時の生活の苦しさを知り、領主と村民の間に立つ肝煎という立場が、まさに肝を煎るほどの辛さだったことが分かった。また、日本では一時絶滅したトキが、当時はこの辺でも多くいたことが分かり、貴重な資料だと思った。（T）

---

「海市」 第36号

2024年6月10日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方